

現代史ノベル

保阪正康

歪んだ回想録

朝日ソノラマ

歪んだ回想録

定価千二百円

初版発行 一九八七年七月三十一日

著者 保阪正康

発行人 喜久村繁

発行所 (株)朝日ソノラマ

東京都中央区銀座四二一六 ☎ 104

電話 〇三五六三六〇二一〜三

振替 東京二四〇三一

印刷所 図書印刷株式会社

製本所 図書印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取りかえします。

〔検印廃止〕

保阪正康

歪んだ回想録

朝日ソノラマ

歪んだ回想録

この作品はフィクションであり、
実在の人物、団体、組織名等は
いっさい関係ありません。

装幀〓木幡朋介
カバーイラスト〓野中
昇

1

奇妙なはがきだった。もう七月というのに年賀はがきをつかっている。そのはがきに十円切手が貼ってある。奇妙なのははがきの表だけではない。裏面は「余は鶏である。」という書きだしだ。時候の挨拶が書いてあるわけではない。未知の人に初めて手紙を出すのを詫びているのでもない。「鶏は朝を告げる。余は朝を告げ様と思って泣いて居る訳ではない。朝を告げて居ると考へるのは人間共の認識である。余の泣き声は余の物である。今、鶏は泣く。夫れを朝と思うか否かは貴君の認識に掛かって居る」

有本邦夫は、はがきを手に首をひねった。

「なんだ、これ」とつぶやいた。

有本は文筆で身を立てている。ノンフィクションやら評論、それにドキュメントも書いている。主に昭和という時代に起こったできごとを題材にしている。読者からの投書も少なくない。匿名の投書のなかには、お前を殺してやる、といった内容のものもあるが、それとて脅かしの域をです、

実際にそんな目にあつたことはない。三月から四月にかけては、精神のバランスを失つたと思われる人物からのはがきも届く。自分は神様だから、お前の気持ちは全てお見通しだ、と書いてあつたりする。木の芽どきのこういう手紙を、有本は、「春の定期便」と名づけて苦笑しながら読むのであつた。

だが、このはがきはそんな定期便とは思えなかつた。

自分が鶏である、というのはピントが外れているように思える。が、文面はそれほどおかしくない。内容は筋道がとおっている。文字は若い世代のものではない。「告げ様と」「夫れを」といった表現は、四十五歳になつた有本だつてつかつたりはしない。

仕事部屋のソファに横になつて、もういちどはがきを眺めてみる。

消し印を確かめる。が、老眼が進んでいる有本には読みにくい。拡大鏡で消し印を大きくしてみると、東京中央郵便局と読める。60・7・6 18・30。たぶん午後六時前後に丸の内界隈で投函したことになるのだらう。とすれば丸の内あたりに職場をもつ老サラリーマンか、それとも東京駅を利用する旅行者かもしれない。

「余は鶏である……か」

有本は、寝そべつたままもういちど声をだして読んでみた。墨がたつぷりついて角ばつた文字の裏に、なかなか人物像は浮かんでこなかつた。

夕食のあとで、有本は、このはがきを団欒の話題にしてみた。

妻の孝子は、はがきを読むと吹きだしてしまった。笑い声は若い。最近になって、有本の収入が

ふえてくると、孝子は急に太り始めた。二重顎を幾重にもくずして笑っている。

「頭の切れた呆け老人だよ、こいつは」

高校生になって、大人の世界がわかりかけてきた長男の俊一が、はがきを手にしながら、変声期が終わりかけた声で言った。鶏を飼っているうちに、鶏と自分の区別がなくなつた老人だよ、と決めつけた。

長女の直子は、そんな推測を制した。

「うちの学校に面白い先生がいるのよ」

短大英文科の二年生で、同級生たちが、化粧だ、アルバイトだ、と学生生活を楽しんでいるらしいのに、そんなことには興味を示さず本ばかり読んでいた。ヘミングウェイやスタインベック、フオクナーとアメリカの作家が好みだった。

「英語の演習の先生なの。今日教えたことを明日忘れていると、『あなたは人間をやめなさい。鶏と同じです』って言うのよ。鶏ってね、三歩歩くともうすべての事は忘れてしまふんですって。だからシッシッと追っ払つても、三歩ぐらい逃げて、あとはまたこっちに帰ってくるっていうのよ」

「じゃあ、このはがきの差し出し人もうこんなはがきを投函したことなんか、とうに忘れているというわけだな」

「そう願いたいわね。こんな手紙を出す人だから、余は犬である、とか、余は猫である、なんてあちこちの物書きにはがきを出しているんじゃないかしら」

と孝子は顔をしかめた。

「そうじゃないわ」

直子は、もう一度はがきに目を走らせている。

「この人は、頭がおかしいんじゃないと思うわ。今、鶏は泣く、ってあるでしょう。泣くというのは、鳴くのまちがいよね。でも、この人は、今、何かをやろうとしているのよ。それを、お父さんにむかって、どう思ふかはあなたの勝手ですよ、と言っているんだわ」

「そんなこと言つて。あなたは小説の読みすぎなのよ」

孝子は、直子をにらんだ。気味のわるいことを言わないでという口ぶりだった。

が、有本は直子の言い分にひっかかりを覚えた。

この差し出し人は、これから何事かを起こそうとしている、と秘かに告げてきたのかもしれない。そう推測して読んでいくと、このはがきは有本に何かのメッセージを伝えてきたともいえる。では何を伝えてきたのか。有本にはさっぱりわからなかった。

奇妙なはがきは、その日から毎日届いた。決まって午後便の郵便物のなかにまぎれこんでいた。

三日目までは、有本も子供たちも、「やっぱり三歩歩くと忘れてしまって、また同じことを書いて投函するんだな」と苦笑いしながら冗談話にしていた。孝子は、無理に笑顔をつくった。電話のベルが鳴るたびに、奇妙なはがきの差し出し人からではないかと気味悪がった。

四日目。夕立ちのしずくが降っている郵便ポストから、このはがきを見つけたとき、有本の顔もこわばった。

「警察に届けたらどうかしら」

「そんな事できるもんか。物書きは警察とはあまり仲よくなんかなりたくない」

孝子は、はがきを手にするのを嫌がった。平穏な家庭への侵入者と決めつけている。

有本は、仕事部屋の机の上に、四通のはがきを並べてみた。毛筆の書体に乱れがなく、どのはがきも同じ筆調である。投函した場所も時間も東京中央郵便局の消し印で、18・30となっている。鶏氏は、あきることなく毎日決まったように投函しつづけている。

有本は、このはがきをもう家族の団欒の場には持ちださなかった。子供たちは学校から帰ると、「今日もあのはがきは来ているの」と眉をひそめてたずねたが、有本は笑ってごまかした。孝子是不快気に身体を震わせた。

「明日も来るようだったら、誰かに相談してみるか」

有本はそんな覚悟を固めた。

五日目、有本は午前中に家をでた。有楽町にある出版社で、単行本企画の打ち合わせをすることになっている。

練馬の幹線道路から奥まった住宅街にある自宅を出るときに、家の周囲に目を走らせてみた。不審な自動車がとまっていたり、見知らぬ人物が徘徊していないか、注意深く確かめてみた。が、建て売り住宅が並ぶその一角は、いつもとかわりのない風景であった。七月の陽射しが、窓をあけはなした家の中にそそいでいる。

出版社の会議室で、打ち合わせが終わったのは午後三時をすぎていた。煙草とコーヒーで、有本

の口は苦くなっていた。午後の郵便配達の間は過ぎている。地下の喫茶室で編集部員たちととりとめのない会話を交しながら、あのはがきが今日も着いているか否か、胸の内で賭けてみた。やはり来ているだろうな、と有本は賭けた。

ダイヤルを回すと、呼びだし音がしばらく鳴りつづけた。恐る恐るといった感じで、受話器があった。

「あなた、やっぱり来ているわ。今日も来ているの」

孝子の声は沈んでいる。

「文面も投函した場所も時刻も同じか」

「気持ちわるくて、あなたの机に置いたままよ。私は見たくないわ……」

「ちょっと目をとおしてくれ。場合によっては相談しようと思っているんだから」

この出版社には、読者からの応対やクレームを引き受ける専門の社員がいる。徳さんと呼ばれている定年間際のその社員に相談してみようかと、有本は思っていた。

「文面は同じよ。余は鶏である。鶏は朝を告げる。余は朝を告げ様と思って泣いて居る訳ではない……」

孝子は読みつづける。こうして電話をとおして聞いていると、きちんと意味がとおっているのに驚かされる。喫茶室の中のざわめきより意味ははつきりしている。

「あら、今日はいつもとはちがうわ。差し出し人の名前が書いてあるわ」

「えっ」

「岡田一郎と書いてあるわ。岡田というのは岡山県の岡と田んぼの田。一郎は一郎、二郎の二郎。でも岡田一郎という名前の下にかっこがついて仮名と書いているの」

岡田一郎（仮名）。墨字の角ばった文字が浮かんた。自分で仮名というのだから本名のはずはない。それにしても岡田一郎という名に心当たりはない。

「住所も書いてあるわよ」

「おい、それを早くいえよ。東京か……」

「新宿区大久保六丁目二千六百番地、ことぶきそう」

「ことぶきそう……お目でたいときの寿だね。そうは草かんむりの荘」

「福美荘の荘よ」

ふたりが結婚したころに住んでいたアパートの名を言った。ふたりにはそれは貧乏の代名詞だった。それが口にするのは、孝子も落ち着いてきた証拠だ。

「五通目で名のりをあげてきたわけだな」

「こんな人、知っているの。やつぱり警察に届けたほうがいいんじゃない」

「だめだよ、そんなことできるか」

喫茶室のクーラーが音をたてている。陽の長い夏。四時をすぎている。有本は、椅子に戻るまでの間に、その寿荘をたずねてみることに決めた。思いたてばすぐに動き出す、そんな自分の性格を押さえることができなかった。岡田一郎という人物がどんな男性なのか、有本には興味がわいてきた。その人物を突きとめて、なぜこんなはがきを出しつづけるのか、それをなじってみたかった。

大久保六丁目は、山手線の新大久保駅から線路沿いに歩いた簡易旅館や連れこみホテル街の一角だった。

モルタルの三階建てとか四階建ての建て物が並んでいる。どぎつい看板のネオンが、御休憩とか御宿泊といった文字を浮かびあがらせている。しかし、二千六百番地というのはない。旧番地なのだろう。有本は六丁目一帯を歩いてみた。

古ぼけた自転車横倒しになっている。すえた臭いがこの一角にもただよっている。夕方の強い陽射しとその臭いに、有本は、頭がくらくらした。

有本の歩いた一帯には寿荘というアパートも旅館もホテルも見あたらない。

五丁目と六丁目の角に、雑貨屋があった。山田雑貨という看板はもう剥げかけている。老婆が虚ろに外の光景をながめていた。寿荘という名の建て物をたずねても知らないという。

「このへんは旅館街なんでしょう」

「ううん、いまは、ほれ、連れ込み宿とかレンタルルームといったポルノ屋にかわってしまったよ」

帳場の前に横ずわりしながら、老婆は答えた。畳の一角をあけて、有本に座るよう勧めた。店番も退屈のようだった。スーパ―にいけば安く手に入る日用品を無造作に積んで売っているだけの、この店がつぶれるのは時間の問題のようであった。

「寿荘といったね、そこの誰をたずねているのかい。簡易旅館には、ほれ、事情があつて田舎に帰

りそびれた人がそのまま五年も十年も住みついでしまうこともあるからね。そんな人は、スーパーで買い物をするよりは、うちのほうが買いやすいといって毎日顔をだすから、知っている人もいるかもしれないよ」

「岡田一郎というんだけど、年齢は、そうだな六十代か七十代だね」

「岡田？ きいたことないね。故郷はどこだい」

「さあ、それはわからない」

手拭いを首に巻いた男が、歯ブラシを一本買っていった。

「ことぶきそう、というのには知らないけど、じゅそうというのなら、ほら、あのホテルオークボというネオンの看板が見えるでしょう。あの辺にじゅそうという旅館があったんだよ。寿と書いてじゅと読むの。昭和の初めからつづいていた割りに客筋のいい宿だったねえ」

「そこに岡田という長期滞在者がいたのかなあ」

「寿荘なら戦前は政治家や軍人が泊まったけど、戦後はくすり売り、大道商人が泊まるようになったからねえ。そんなかに岡田という人がいたかどうかまでは、知らないよ」

有本は店をでるときに、ボールペンを五本買った。老婆はそれを新聞紙の小さな切れ端で包んだ。東京の歓楽街の一角に、いまの時代など知ったことじゃない、といわんばかりに商いをする雑貨屋に、有本の心は和んだ。

ホテルオークボのドアをあけると、蝶ネクタイのボーイが暗いカウンターから顔をだした。一人客にも別に驚いた風はなかった。が、有本の質問を耳にすると、とたんに不快な表情になった。戦

前のことなど知るわけないだろう、という口ぶりだった。経営者にきいてもらえないか、と言ってもととりつくシマはない。経営者の名前など明かせないと口調も険しい。それだけではない。目付きも鋭くなった。

「どこの旦那ですか。別にうちは法律に反するようなことはしてないですけどね……」

有本は刑事にまちがわれたらしい。

植え込みの玄関を出て「六一——」と記された番地をメモにとっていると、ボーイが出て来て塩を撒いた。この日の口あけの客に不快さを示す態度が露骨であった。

奇妙なはがきは、次の日から届かなくなった。最後のはがきで岡田一郎と名のつて正体を見せたといわんばかりであった。

一週間もたつと、有本は、そのはがきの内容も忘れてしまった。妻も子供たちも、はがきを話題にすることはなかった。

2

玄関のチャイムがなんども鳴りつづけている。

妻も子供たちも夏休みにはいるとすぐに、有本の故郷である札幌に出かけてしまった。四週間の予定で、有本の両親とすごす。それが何年来の習慣になっている。役人を退職した父は、のんびりとした隠居生活をすごしているが、有本の家族とのこの四週間を楽しみにしている。

チャイムは執拗であった。

有本は、書きかけの原稿を止めて、階下に降りていった。

「どちら様でしょうか」

「先生のご著書を読ませていただいている佐藤という者です。大阪で高校教師をしとるんですが、いちど先生にお目にかかりたいと大阪からたずねてきたんですわ」

事前に何の連絡もなしに、突然訪ねてくることへの詫びもない。読者といえは会うのはあたりまえという響きが、関西弁の端々に浮かんではいる。不愉快な訪問者であった。

「先生にぜひお会いしたいんですわ。わざわざ大阪から来たよって……」

「こっちにも予定があるんですけどね」

「それはわかります。でも先生に一言お話しがしたくて……。三十分でいいんですわ」

舌打ちしながら、有本は、玄関のドアを開けた。まだ二十代後半のポロシャツ姿の青年が、笑顔を見せて立っている。革かばんをもち、手にはお土産らしい包みをもっている。玄関脇の和室の応接間に座っても青年の表情は目尻を下げた笑いつづけている。これでは生徒になめられてしまうのでは、と気にかかるほど幼い表情だった。

「先生の昭和史に関する著作はほんまに参考になるよって、よく読ませていただいていますわ」

如才なく語りかける。そしてかばんから有本の著作を数冊とりだした。余白の頁を開いてサインをしてくれないかという。胸ポケットから筆ペンを取りだして、有本にわたした。そのペースにはまって、有本は自著に次々とサインをしていった。こういうふんい気づくりのうまい人間なのか